

蜜柑

芥川龍之介

青空文庫

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり
 發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一
 人も乗客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラトフオオムにも、今日は珍らし
 く見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時時悲しうに、
 吠え立ててゐた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。
 私の頭の中には云ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんより
 した影を落してゐた。私は外套のポケットへちつと兩手をつつこんだ儘、そこには
 ひつてゐる夕刊を出して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。
 が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭
 をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちか
 まへてゐた。所がそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出
 したと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乗つてゐる二等室の戸が
 がらりと開いて十三四の小娘が一人、慌しく中へはひつて來た。と同時に一つづしりと
 揺れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラトフオオムの柱、置き

わすれたやうな運水車、それから車内の誰かに祝儀の禮を云つてゐる赤帽——さう云ふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心もちになつて、巻煙草に火をつけながら、始めて懶い睞をあげて、前の席に腰を下してゐた小娘の顔を一瞥した。

それは油氣のない髪をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある鞆だらけのりやうほほを氣持の悪い程赤く火照らせた、如何にも田舎者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌黄色の毛絲の襟巻がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なものやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れないと云ふ心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。すると其時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電燈の光に變つて、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで來た。云ふ迄もなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはひつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく世間は餘りに平凡な出来事ばかりで持ち切つてゐた。講和問題、新婦、新郎、流職事件、死亡廣告——私は隧道へはひつた一瞬間、汽車の走つてゐる方向が逆になつたやうな錯覺を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆、機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、恰も卑俗な現實を人間にしたやうな面もちで、私の前に坐つてゐる事を絶えず意識せずにはゐられなかつた。このトンネルの中の汽車と、この田舎者の小娘と、さうして又この平凡な記事に埋つてゐる夕刊と、——これが象徴でなくて何であらう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であらう。私は一切がくだらなくなつて、讀みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を寄せながら、死んだやうに眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心もちがして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思ふやうにあがらないらしい。あの靴だらけの頬は愈々赤くなつて、時時鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる聲と一し

よに、せはしなく耳へはひつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに
 足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかからうとしてゐる事
 は、暮色の中に枯草ばかり明い、兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たので
 も、すぐに合點の行く事であつた。にも關らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸
 を下さうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、單にこ
 の小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感
 情を蓄へながら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして惡戰苦闘する容子を、
 まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間
 もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けよう
 とした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶
 したやうなすす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて濛濛と車内へ漲り出した。元
 來咽喉を害してゐた私は、手巾を顔に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴び
 せられたおかげで、殆ど息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私
 に頓著する氣色も見えず、窓から外へ首をのぼして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の
 毛を戦がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の

光ひかりの中なかに眺ながめた時とき、もう窓まどの外そとが見みる見みる明あかるくなつて、そこから土つちの勻にほひや枯かれ草くさの勻にほひや水みづの勻にほひや冷やかに流ながれこんで來こなかつたなら、漸やうやく咳せきやんだ私わたくしは、この見み知らない小こ娘むすめを頭あたまごなしに叱しかりつけてでも、又また元の通とほり窓まどの戸とをしめさせたのに相さう違ちがなかつたのである。

しかし汽き車しゃはその時じ分ぶんには、もう安やす安やすと隧トンネル道すべを迂うりぬけて、枯かれ草くさの山やまと山やまとの間あひだに挟はさまれた、或ある貧まつしい町まちはづれの踏ふみ切きりに通とほりかかつてゐた。踏ふみ切きりの近ちかくには、いづれも見みすほらしい藁わら屋や根ねや瓦かほら屋や根ねがごみごみと狭せま苦くるしく建たてこんで、踏ふみ切きり番ばんが振ふるのであらう、唯ただ一りう旒のうのうす白しろい旗はたが懶ものうげに暮ぼ色しよくを搖ゆつてゐた。やつと隧トンネル道でを出でたと思おもふ

—その時ときその蕭せう索さくとした踏ふみ切きりの柵さくの向むかうに、私わたくしは頬ほほの赤あかい三人にんの男をとこの子こが、目め白しろ押おしに竝ならんで立たつてゐるのを見みた。彼かれ等らは皆みな、この曇どん天てんに押おしすくめられたかと思おもふ程ほど、揃そろつて脊せいが低ひくかつた。さうして又またこの町まちはづれの陰いん慘さんたる風ふう物ぶつと同じやうな色いろの著き物ものを著きてゐた。それが汽き車しゃの通とほるのを仰あふぎ見みながら、一せい齊せいに手てを舉あげるが早はやいか、いたいけな喉のどを高く反そらせて、何なんとも意味い味みの分わからない喊かん聲せいを一生しやう懸けん命めいに逆さからせた。するとその瞬しゆん間かんである。窓まどから半はん身しんを乗のり出だしてゐた例れいの娘むすめが、あの霜しも焼やけの手てをつとのばして、勢いきほひよく左さ右うに振ふつたと思おもふと、忽たちまち心こころを躍をどらすばかり暖あたたかひいろの色いろに染そまつてゐる蜜み柑かんが凡およいつむつ六むつつ、汽き車しゃを見み送おくつた子こ供どもたちの上うへへばらばらと空そらから降ふつて來きた。私わたくしは思おもは

ず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懷に藏してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに來た弟たちの勞に報いたのである。

暮色を帯びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに聲を擧げた三人の子供たちと、さうしてその上に亂落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。さうしてそこから、或得體の知れない朗な心もちが湧き上つて來るのを意識した。私は昂然と頭を擧げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返つて、不相變鞆だらけの頬を萌黄色の毛絲の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。……

私はこの時始めて、云ひやうのない疲勞と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出來たのである。

(大正八年四月作)

青空文庫情報

底本：「現代日本文學全集 第三〇篇 芥川龍之介集」改造社

1928（昭和3）年1月9日発行

初出：「新潮」

1919（大正8）年5月1日

※表題は底本では、「蜜柑《みかん》」となっています。

入力：高柳典子

校正：岡山勝美

2012年2月8日作成

2012年3月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蜜柑

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>